

# 板付 I 式成立前後の壺形土器

—分類と編年の検討—

徳島大学 端野晋平

## 要旨

本稿の目的は、北部九州の縄文時代晩期後葉～弥生時代前期末葉の壺形土器の分類と型式設定、あわせて福岡平野の土器編年を検討することである。これまでの研究では、結果として設定された型式・時期自体の分析単位としての妥当性を問うたものは意外なほど少ない。そこで筆者は、田中良之が考案した「2属性相関法」を用いて、壺形土器の分類と型式の設定を行い、「一括資料の非直列的配列」によって編年を行った。その結果、当該期の壺形土器は7型式が設定され、土器編年は7期に区分された。突帯文単純期については、近年3期に細分する案が主流になりつつあるが、一括資料群間に見出せた境界からみて、2期に細分した。また、突帯文土器が従来の板付IIa式期まで残存することを認めた。さらに、こうした分析をふまえ、朝鮮半島・日本列島間の土器編年の併行関係、日本列島の壺形土器の系譜と起源地について議論した。

キーワード：壺形土器、分類、型式、編年、2属性相関法

## はじめに

日本列島（以下、列島と略する）においては、朝鮮半島（以下、半島と略する）から水稻農耕の開始とともに、壺形土器（以下、壺と略する）が導入される。様式構造における壺という外来の精製器種の導入と、生業システムや文化構造の変化は連動しており（田中良之1986）、この導入に大きな画期を認め、背後に半島からの渡来人の一定の関与を想定する見解も提出されている。その一方で、壺は導入当初、器形こそ半島のそれに類似している例もあるものの、ほとんどが在来の製作技術による産物と考えられ、この時期の外来文化受容の実態を物語る好材料ともされてきた。

本稿の目的は、北部九州の板付I式成立前後の壺の分類と型式設定、合わせて土器編年を検討し、編年自体の妥当性の点検と、壺の系譜問題を議論することである。また、これらの作業は、壺の受容、板付I式の成立、さらに列島西部における遠賀川系土器の広がりについての議論のための基礎づくりも兼ねている。なお、本稿では、文化構造の変化完了を象徴する指標を

板付Ⅰ式壺とみて、この出現をもって弥生時代の開始とみたい<sup>1)</sup>。

## I 問題の所在

まず、本稿の目的に関わる先行研究を概観し、その問題点を明らかにしたい。以下、弥生時代開始前後の土器編年をめぐる議論、壺の系譜・受容をめぐる議論に分けて論述する。

**弥生時代開始前後の土器編年をめぐる議論** 北部九州における刻目突帯文土器の時期（以下、突帯文期と呼ぶ）から弥生前期までの土器の編年研究を、紙幅の都合上、1980年代以降からごく簡単に述べる。すでに1980年代までの学史は田中良之（1986）や藤尾慎一郎（1990）、2000年代までの学史は宮地聡一郎（2008）の優れた整理があるので、詳細はそちらを参照されたい。

1980年代には、福岡県板付遺跡、佐賀県菜畑遺跡、福岡県石崎曲り田遺跡の調査成果にもとづいて、山崎純男（1980）、中島直幸（1982）、橋口達也（1985）によって編年案が提示された。これらは、突帯文単純期を2期に分け、その後に板付Ⅰ式・突帯文（夜白式）共伴期が続くという序列を示した点で共通している。こうした研究と併行して、福岡県今川遺跡Ⅴ字溝出土土器にもとづいて、伊崎俊秋は板付Ⅰ式・突帯文共伴期の後に、「夜白式を含めぬ板付Ⅰ式」の時期を設定した（伊崎1981）。

1990年代になると、1980年代に提示された編年序列をおおむねトレースするかたちで、その細分や器種ごとの型式組列の体系的な整理を目指して行われてきた（藤尾1990；田崎1994；吉留1994）。また、今川遺跡Ⅴ字溝出土土器を指標とする時期を、「板付Ⅱa式（古）」（菅波2000a）、「板付Ⅰb式」（田畑2000）というように呼び名の違いはあるが、福岡平野の資料（雀居遺跡5次調査SK188など）で設定する研究も現れた。

2000年代以降は、北部九州・瀬戸内・近畿間における突帯文土器の併行関係の議論に関連して、山の寺式・夜白Ⅰ式よりもさかのぼる突帯文期が編年に組み込まれるようになり（宮地2004a, 2004b, 2008；小南2005）、板付遺跡の未発表資料の整理結果にもとづいて、編年の再検討も試みられている（宮本2011）。また、「板付Ⅰb式」甕の編年的位置と成立地について、瀬戸内海沿岸の資料をも含めた検討も行われている（松尾2012）。

**壺の系譜・受容をめぐる議論** 1960年代、突帯文期の壺は、それよりさかのぼる時期の縄文土器（黒川式）に系譜が求められていた（森1966）。1970年代になり、半島南部の丹塗磨研土器との関係がしばしば問題にされてはいたが（杉原1977；橋口1979；後藤1980）、最初にそれとの系譜関係を明確に示したのは沈奉謹（1979）である<sup>2)</sup>。その後、器厚と胎土からみて、北部九州には、半島南部からの搬入品と断定し得る資料はないという見解が示された（小田1986）。1990年代以降は、頸部に施されたミガキの方向を題材に、九州での壺の製作者の技術系譜を論じる論考（中園1994）、半島からの渡来人が北部九州の集落で占める比率を論じる論考（家根1997）が提出された。半島の丹塗磨研壺によくみられる丸底は、技術的な問題から、九州北部では受容されなかったという見解（中村2003）も出された。こうした研究状

況を顧みて、筆者は半島南部の丹塗磨研壺を主たる対象として、編年、地域性、ミガキの方向を検討し、その結果をふまえ、列島の壺の起源地について議論してきた（端野2003, 2006；Hashino2011）。最近では、壺が導入された当初であっても、在来の製作技術で作られたものが優勢であることを分析的に示した論考もある（三阪2014）。

以上、当該期の土器編年および壺の系譜・受容に関する学史を概観した。これをふまえ、ここでは先行研究に内在する問題の所在を明らかにしたい。まず、土器編年に関わる論点については、すでに小南（2005）が簡潔に整理している。すなわち、①山ノ寺式と夜臼式の編年的位置づけ、②吉留編年「3式」の時間的独立性、③板付 I 式単純期の在否をめぐる問題といった三つの論点である。本稿ではこのうち、②・③について議論したい。こうした学史上の論点は、編年を行うための方法論上の問題とも無関係ではあるまい。これまでに提出された編年研究は多いが、その基礎をなす型式の、分類単位としての妥当性はほとんど問われていないのが現状である。また、結果として設定された一時期が、果たして考古学的な分析単位として妥当であるのか、設定にいたるまでの作業過程を十分に明示した論考は多くない。そこで、本稿ではこれらの点を考慮しつつ、分析結果の妥当性を読者にも検証しやすいよう、作業過程を極力、明らかにしながら編年を試みたい。

次に、壺の系譜については筆者自身、これまでもたびたび論じてきたが、それは半島南部の資料を中心とした分析によるものであり、列島の資料については、論拠となる事実や概略の提示にとどまっていた。そこで、本稿では、北部九州における壺の型式設定と編年を行い、その結果にもとづいて、壺形土器の系譜の問題に対して、再びアプローチを試みたい。

## II 資料と方法

壺の分類と型式設定に用いた資料は、北部九州の縄文晩期後葉～弥生前期末に属する31遺跡から得られた222例である。遺跡名と文献は次の通りである。佐賀県唐津市菜畑（唐津市教委1982）、佐賀県呼子町大友（九大考古研2001）、福岡県糸島市石崎矢風（二丈町教委1997）、同大坪（二丈町教委1995）、同新町（志摩町教委1987）、同石崎曲り田（福岡県教委1984）、同三雲・井原（福岡県教委1981）、福岡県大野城市御陵前ノ椽（大野城市教委1997）、同中・寺尾（大野町教委1971；大野城市教委1977）、福岡県春日市伯玄社（春日市教委2003）、同平若 A（春日市教委2011）、福岡県志免町松ヶ上（志免町教委1996）、福岡県福岡市有田七田前（福岡市教委1983）、同石丸・古川（住宅・都市整備公団1982）、同田村（福岡市教委1989）、同東入部（福岡市教委1999）、同藤崎（福岡市教委1982）、同鶴町（福岡市教委1976a）、同橋本一丁田（福岡市教委1998）、同板付（福岡市教委1979, 1981, 1995；山崎1980）、同雀居（福岡市教委2000）、同雑餉隈（福岡市教委2005b）、同下月隈天神森（福岡市教委1996b）、同那珂（福岡市教委1992a, 1994）、同比恵（福岡市教委1991, 1992, 1993）、同野多目（福岡市教委1987）、福岡県福津市今川（津屋崎町教委1981）、福岡県宗像市久原（宗像市教委1999）、同田久松ヶ浦（宗像市教委1999）、同大井三倉（宗像市教委1987）、同東郷登り立（宗像市教委2001）。編年には、福岡平野



に所在する遺跡から得られた一括資料を用いた。これは対象とする時期幅において、この地域で得られた一括資料が最も充実していることによる。一括資料名と文献は次の通りである。板付 E5・6区8・9層(山崎1980;福岡市教委1981),板付 G7a・b区下層(山崎1980),板付市営住宅1区 SK106・SK32(福岡市教委1976b),雀居10次 SK002・SK018・SK124(福岡市教委2003a),同12次 SK024(福岡市教委2003b),雀居5次 SD003下層・SK159・SK188(福岡市教委1995a),雀居9次169号土坑(福岡市教委2000),下月隈 C SD507・SK460・SK488・SK500(福岡市教委2005a),那珂21次 SK47(福岡市教委1992a),同37次 SD02(福岡市教委1994),比恵25次7-2層,比恵28次 SK03(福岡市教委1991),比恵30次 SU006・SU010・SU016下層・SU022(福岡市教委1992b),比恵37次 SU039(福岡市教委1993),諸岡 F区黒色粘質土層(福岡市教委1976c)。

最初に、対象とする資料を、器形の違いによって器種分類を行う。特に壺については、サイズの差によって器種の細分を行う。壺の型式設定にあたっては、田中良之が考案した「2属性相関法」(田中良之1982;田中・松永1984)を用いる<sup>3)</sup>。この方法を要約すると、次の通りである。まず、対象とする土器を構成する属性のうち、分類に有意と思われる属性を取り上げ、その変異を抽出する。そして、各属性において、型式学的なグルーピングや変化の方向性の想定を行う。次に、縦軸と横軸にそれぞれ異なる1属性をおいた相関行列表を作成し、そこに示された同一個体内における2属性の共伴例から、属性間の相関状況を検討する。この作業を異なる2属性の組み合わせで行うことによって、先に想定した複数の属性における変化の方向性を検証すると同時に、有意な型式を構成する各属性の変異幅を見出す。その他の器種については、先行研究(藤尾1990;家根1993;吉留1994;宮地2004a, 2004b, 2008;小南2005)に学びつつ、それぞれの特徴的な属性によって分類する。これらは厳密には、型式としての分類単位の妥当性が検証されたものではないが、編年の検討に際して、有効な指標となるよう時間性を備えたものとする。

編年にあたっては、まず同一の遺構・層から出土し、一括資料として捉えられる土器群を、型式学的に古新の傾向に沿って配列する。そして、配列された一括資料の間に、型式変化、器種の生成・消滅が同時に起こる画期を探し出す。この結果にもとづいて、一群にまとめられた一括資料群からなる「期」を設定する。これは、溝口孝司(1987, 1988)がD. L. クラークが概念化した文化の通時的変化とその構成諸要素との関係の概念図(Clarke1978, p.235)に示唆を受け提示したという「様式」設定の方法に由来する。この方法は、岩永省三(1989)のいう「一括資料の非直列的の排列」にあたり、もともとは武末純一(1977a, 1977b, 1978)に見出された方法であり、一時期に一器種において複数型式の併存を認めることを最大の特徴とする<sup>4)</sup>。

### Ⅲ 分析結果

#### A 器種分類

ここでは型式分類に先立ち、器種分類を行う。本稿で編年の基準として用いる器種は、壺・



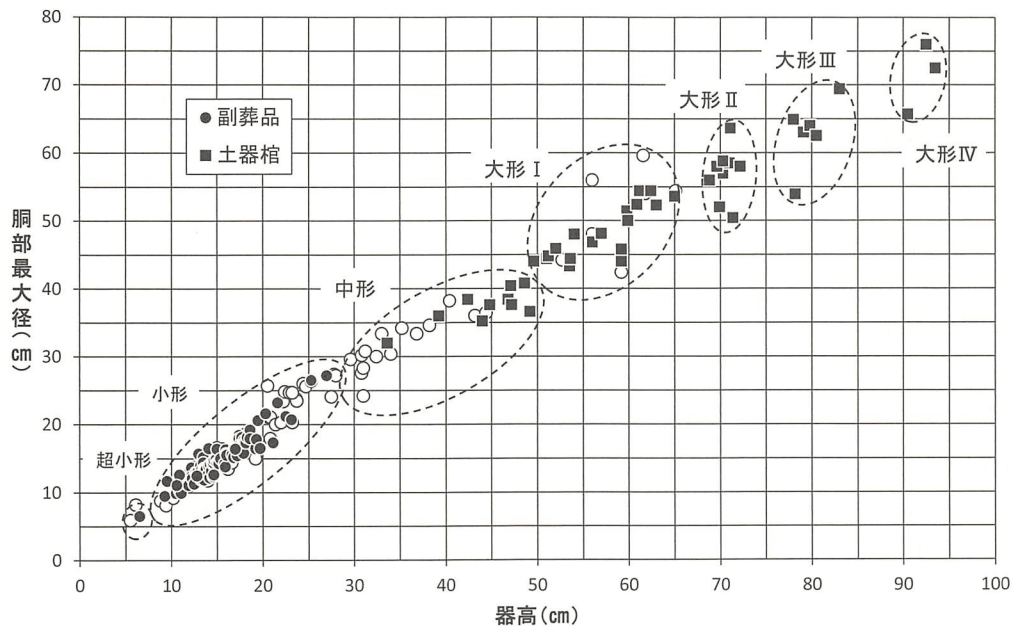


図1 壺の細別器種分類

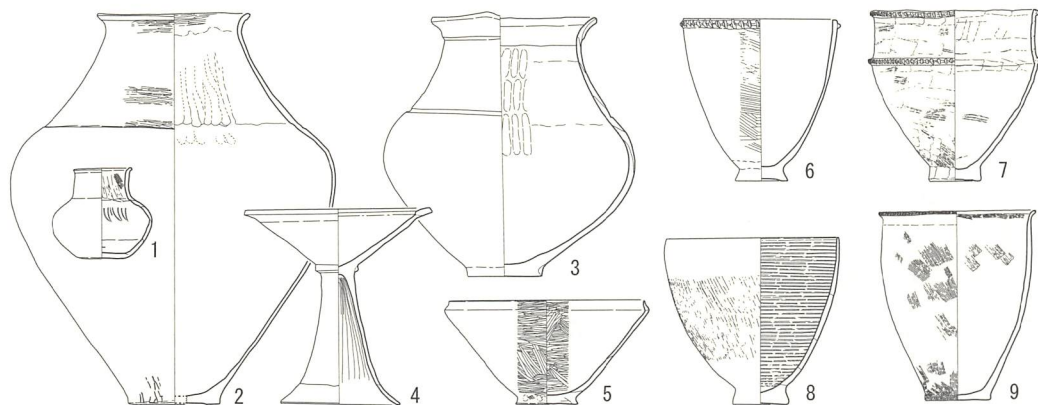


図2 器種分類図 (1/10)

1. 小形壺 2. 大形壺 3. 中形壺 4. 高坏 5. 浅鉢 6・7. 突帯文系深鉢／甑 8・9. 如意形口縁系深鉢／甑

深鉢／甑・浅鉢／高坏の三者である。このうち、壺と深鉢／甑はそれぞれ、サイズと口縁部の形態によって細分できる。図1は、対象資料とした壺の中から、器高と胸部最大径とを把握し得た例を抽出し、両者の関係を示した散布図である。この図で示された個々のサンプルの疎密にもとづいて、小さい方から順に、「超小形」「小形」「中形」「大形I」「大形II」「大形III」「大形IV」という7群の設定が可能である。個々のサンプルの出土状況を見ると、超小形・小形には副葬品、中形・大形I～IVには土器棺として利用されたものが含まれており、サイズによる明確な使い分けが存在したことがわかる。次節では、このうちの小形を対象として、分類

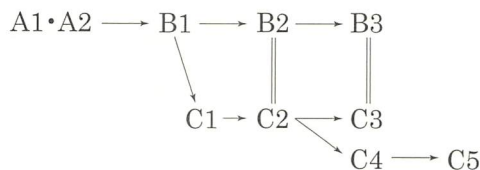
と型式設定を行う。深鉢／甕は、口縁部の外面に突帯をもつ「突帯文系」と、突帯をもたず、内湾ないし直立していた口縁部が外反していく「如意形口縁系」の2系統に分けられる(図2)。

## B 型式分類

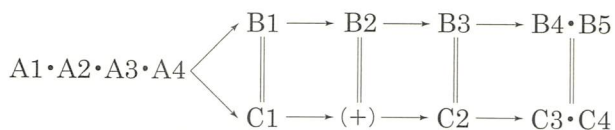
### (1) 壺

まず、口頸部形態・底部形態・胴部文様・胴部形態の4属性の変異を抽出し、属性ごとの変化の方向性を想定する(図3~6, 表1)。

**口頸部形態** 半島の無文土器文化の丹塗磨研壺にみられるA1・A2・A3類のうち、A1・A2を祖型として口縁部外面に段をもつB1類が発生し、そこから分岐して段をもつ系列(B2類→B3類)、段をもたない系列(C1類→C2類→C3類)という2系列を想定すれば、型式学的に理解しやすい。そして、B2類とC2類、B3類とC3類の間には、頸部・胴部境界のあり方の共通性にもとづけば、型式学的親縁関係を想定できる。また、C2類を祖型とする、C3類への変化とは異なる変化として、より口縁部の外反、頸部・胴部境界の内面の稜が強まったC4類、さらに頸部・胴部境界の外面に貼付突帯を付したC5類という変化を想定できる。以上の変化の方向性を模式化すると、以下のようになる。



**底部形態** 無文土器文化の丹塗磨研壺にみられるか、それに近いA1・A2・A3・A4類を祖型として、底面が平坦な系列(B1類→B2類→B3類→B4・B5類)と上げ底状の系列(C1類→C2類→C3・C4類)という2系列への分岐を想定することができる。B1類とC1類、B3類とC2類は、外面の底面から胴部にかけての立ち上げり方の共通性にもとづけば、型式学的親縁関係を想定できる。また、B4・B5・C3・C4類についても、高台部の高さや形態の類似性にもとづけば、親縁関係を想定できる。以上の変化の方向性を模式化すると、以下のようになる。



なお、縄文時代晩期の深鉢の底部に系統が求められるJ1・J2類は、以上の系統関係には組み込み得ない。

**胴部文様** ここでは、沈線文、彩文の別を問わず、胴部に施された文様を対象とするが、大きくみて、最も単純な横走直線文に始まり、山形文の発生と退化、そして有軸羽状文の発生と退化という変化の方向性(1類→2類→3類→4類→5類→6類→7類→8類→9類)を想定する

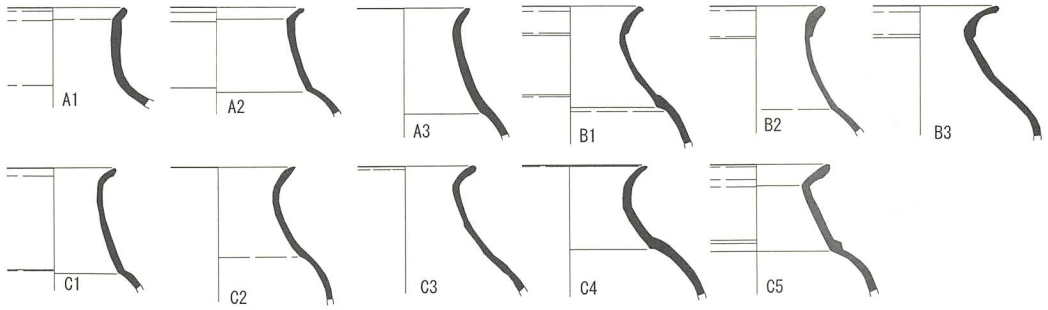


図3 口頸部形態の変異

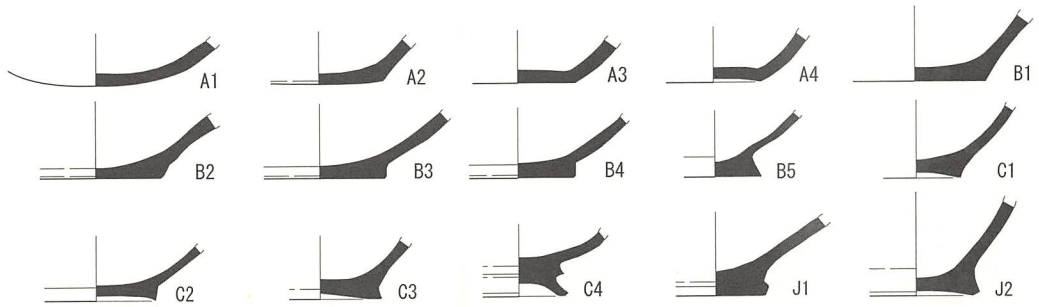


図4 底部形態の変異

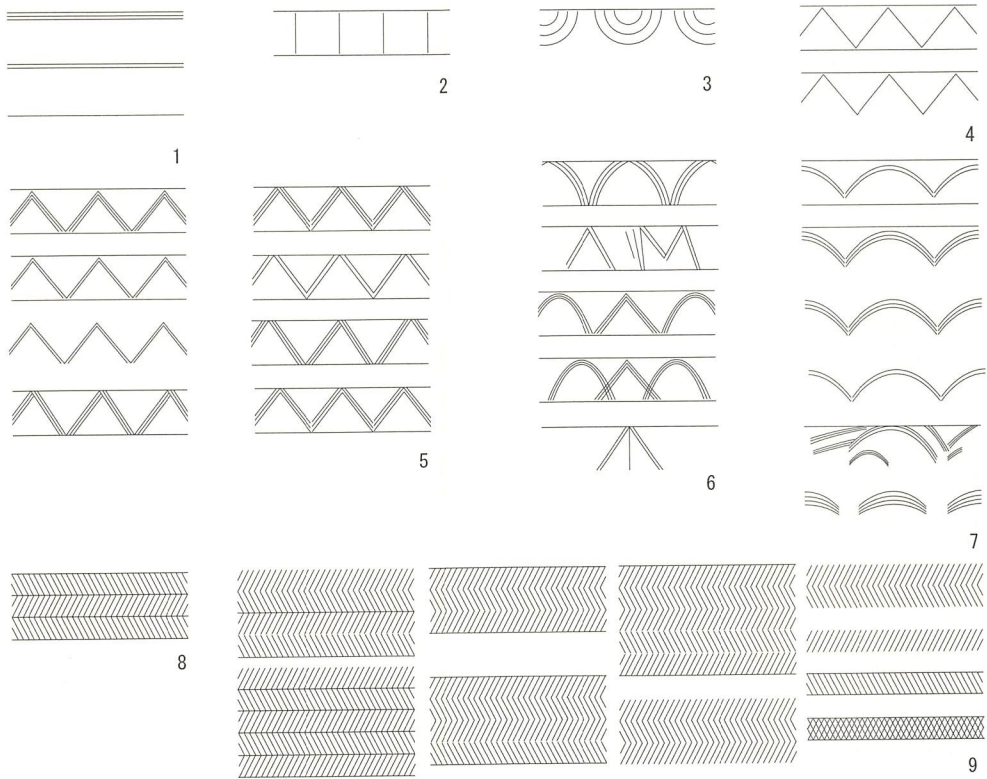


図5 胴部文様の変異



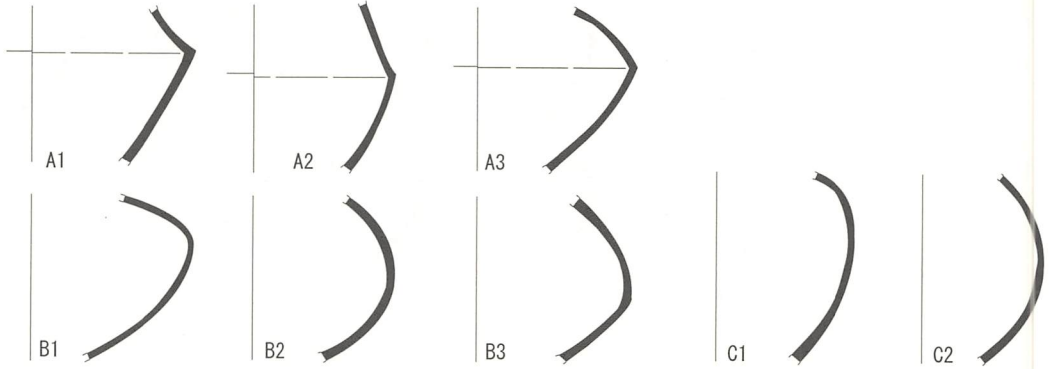


図6 胴部形態の変異

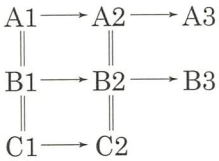
表1 属性変異一覧表

<b>口頸部形態</b>	
A1: 頸部が直立し、頸部・胴部境界に明瞭な稜をもつもの。	C1: 上げ底状の底部。外面は底面からカーブしながら立ち上がる。
A2: 頸部が内傾し、頸部・胴部境界に明瞭な稜をもつもの。	C2: 高台をもつ底部。高台部の外面は直立し、底面が上げ底状のもの。
A3: 頸部が内傾し、頸部と胴部とが滑らかにつながるもの。	C3: 高台をもつ底部。高台部の外面は外開きで、底面が上げ底状のもの。
B1: 頸部が内傾し、口縁部外面に段、頸部・胴部境界の内外面に段をもつもの。	C4: 高台をもつ底部。高台部が上げ底で、ハの字状に開き、胴部との境界に突帯をもつ。
B2: 頸部が内傾し、口縁部外面に段、頸部と胴部の境界の内面に稜をもつもの。	J1: 平底。外側への張り出し部をもつ。
B3: 頸部が内傾し、口縁部外面に段をもち、頸部と胴部とが滑らかにつながるもの。	J2: 上げ底状の平底。接地面は平坦ではない。外面は外開きで、胴部との境界に稜をもつ。
C1: 頸部が内傾し、口縁部外面に段をもち、頸部・胴部境界の内外面に稜をもつもの。	
C2: 頸部が内傾し、口縁部外面に段をもち、頸部・胴部境界の内面に稜をもつもの。	<b>胴部文様</b>
C3: 頸部が内傾し、口縁部外面に段をもち、頸部・胴部境界の内面に強い稜をもつもの。	1: 1～3条の横走直線文。
C4: 頸部が内傾し、口縁部外面に段をもち、頸部と胴部とが滑らかにつながるもの。A3類よりも口縁部が強く外反する。	2: 2条の横走直線文の間に縦線を配したもの。
C5: 頸部が内傾し、口縁部外面に段をもち、頸部・胴部境界の外面に貼付突帯、内面に稜をもつもの。	3: 1条の横走直線文の下に複線半円文を配したもの。
	4: 単線山形文。
<b>底部形態</b>	5: 複線山形文。
A1: 丸底。	6: 退化山形文。
A2: 不安定な平底。底面はやや丸みを帯びる。	7: 重弧文。
A3: 平底。外面は底面からやや丸みを帯びつつ立ち上がる。	8: 有軸羽状文。
A4: やや上げ底状の平底。外面は底面からやや丸みを帯びつつ立ち上がる。	9: 有軸・無軸羽状文、無軸羽状文、単斜線文、斜格子文といった有軸羽状文の退化形態。
B1: 平底。外面は底面からカーブしながら立ち上がる。	<b>胴部形態</b>
B2: 平底。外面は底面からカーブしながら立ち上がり、稜をもつ。	A1: 屈曲部を上位にもち、上半は外側にカーブしつつ内傾するもの。
B3: 高台をもつ底部。高台部の外面は直立し、底面は平坦。	A2: 屈曲部を中位にもち、上半は直線的に内傾するもの。
B4: 高台をもつ底部。高台部の外面は直立し、底面は平坦。B3類より高台部が高いもの。	A3: 屈曲部を中位にもち、上半は丸みを帯びつつ内傾するもの。
B5: 高台をもつ底部。高台部の外面は外開きで、底面は平坦。	B1: 扁球形で胴部最大径の位置を上位にもつもの。
	B2: 扁球形で胴部最大径の位置を中位にもつもの。
	B3: 扁球形で胴部最大径の位置を下位にもつもの。
	C1: 球形で胴部最大径の位置を上位にもつもの。
	C2: 球形で胴部最大径の位置を中位にもつもの。

ことができる<sup>5)</sup>。

**胴部形態** 肩に屈曲をもつ系列(A系列), 扁球形の系列(B系列), 球形の系列(C系列)の3系列に整理できる。A系列は縄文晩期の浅鉢の胴部と類似するA1類を起点としてA2類からA3類, B系列は縄文晩期の浅鉢のように肩の張ったB1類を起点としてB2類からB3類, C系列も浅鉢のように肩の張ったC1類からC2類という変化の方向性を想定できる。さらに、

A1類とB1類とC1類、A2類とB2類とC2類のそれぞれの間には、胴部最大径の位置の共通性にもとづけば、型式学的親縁関係を想定できる。以上の変化の方向性を模式化すると、以下のようなになる。



次に、これまで見てきた属性ごとの変化の方向性を、同一個体内共伴例から属性間の相関状況を求めることによって検証し、同時に安定した分類単位を見出すことによって、型式の設定を行う。対象とした4属性における2属性間の組み合わせには12通りがある。ここではそのうち、有益な結果が得られた口頸部形態×底部形態、口頸部形態×胴部文様、口頸部形態×胴部形態、それぞれについての検討結果を示す。

		底部形態														
		J1	J2	A1	A2	A3	A4	B1	C1	B2	B3	C2	B4	B5	C3	C4
口頸部形態	A1	+			+	△	△	△	+							
	A2		+	○	△	△	△	△	△			+				
	A3				+		△	△	+				+			
	B1									+	+	○		+		
	C1							+				+				
	B2				+	+			+	△	△	△	○			
	C2				+	+			+	+	△	△	△	△	+	+
	B3								△	+	+		△	+	+	
	C3								△	○	△	△	△		+	△
	C4								△	△		+	△	△		+
C5								+		+						

a 口頸部形態 × 底部形態

		胴部文様									
		無	1	2	3	4	5	6	7	8	9
口頸部形態	A1	◎	+	+							
	A2	◎	△	+		+					
	A3	○			+	+					
	B1	◎	+								
	C1	+					+				
	B2	△	△				△	△	△	△	
	C2	○	△			+	○	○	+		
	B3	○	△				△		+		△
	C3	△	○				△		△	+	○
	C4	○	△							△	○
C5										△	

b 口頸部形態 × 胴部文様

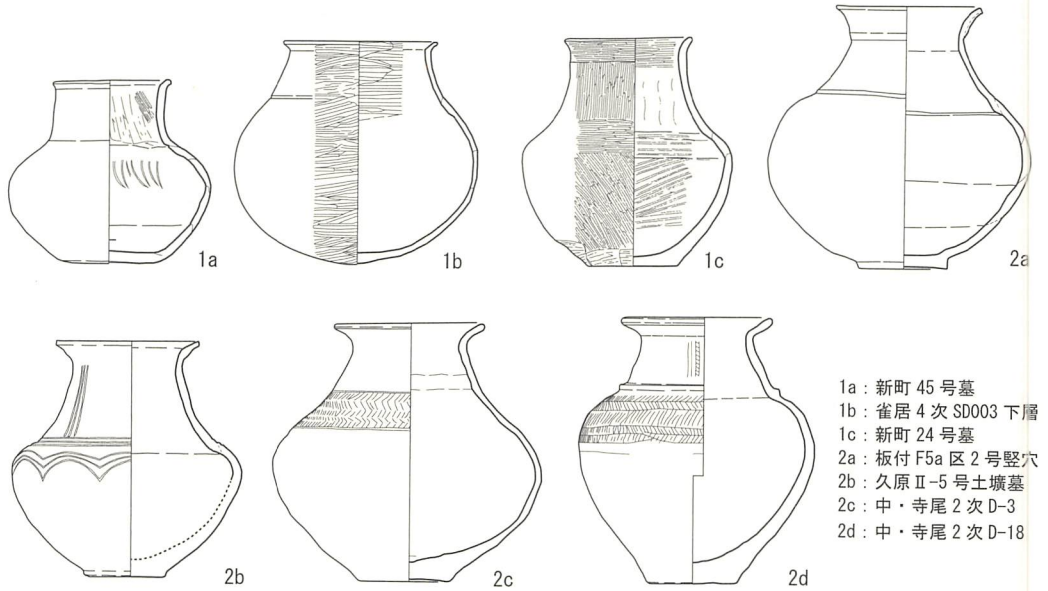
		胴部形態							
		A1	B1	C1	A2	B2	C2	A3	B3
口頸部形態	A1	△	○	+	+	△	+		
	A2		◎	◎		△	△		
	A3		△	△			△		
	B1			○			△		△
	C1		△						
	B2	+	△			○	+		△
	C2		○			△	○	○	△
	B3			+		○	△		+
	C3	+	△	△	+	◎	△	△	
	C4		+	◎		○	△		+
C5		+	+						

c 口頸部形態 × 胴部形態

◎: 10例以上  
○: 5~9例  
△: 2~4例  
+: 1例

図7 属性間の相関図

口頸部形態×底部形態 (図7-a) 口頸部形態 A1~3類は底部形態 A1~4・B1・C1類を、口頸部形態 B1~3・C1~5類は底部形態 B1~5・C1~4類を中心に相関していることがわかる。すなわち、口頸部形態A類とB・C類の間で、強く相関する底部形態を異にしている。これは先に想定した口頸部形態 A1~3類→B1~3類・C1~5類、および底部形態 A1~4類→B1~5類・C1~4類という変化の方向性を検証するものである。同時に、口頸部形態A類、B・C類のそれぞれを指標とする2群を有意な分類単位として認めることができる。ところで、直立す



1a : 新町 45 号墓  
 1b : 雀居 4 次 SD003 下層  
 1c : 新町 24 号墓  
 2a : 板付 F5a 区 2 号竪穴  
 2b : 久原 II-5 号土壙墓  
 2c : 中・寺尾 2 次 D-3  
 2d : 中・寺尾 2 次 D-18

図8 壺形土器の型式 (1/5)

る口頸部から内傾する口頸部，丸底から平底という変化の想定（中園1994ほか）もあるが，これには賛同できない。というのも，この想定が正しければ，直立口頸部（A1類）と丸底（A1類）の間，内傾口頸部（A2類）と平底（A2・A3・A4類）の間で，強い相関が認められるはずであるが，実際はそうではないからである。後で明らかにするように，口頸部の直立と内傾，丸底と平底は時期差ではなく，系統差である。

口頸部形態×胴部文様（図7-b） 口頸部形態 A1～3類は胴部文様「無」・1～4類と相関する。口頸部形態 B1類は胴部文様「無」・1類と相関する。口頸部形態 C1・B2・C2類は胴部文様「無」・4～8類と相関する。口頸部形態 B3・C3・C4類は胴部文様「無」・5・7・8・9類と相関する。口頸部形態 C5類は胴部文様9類だけと相関する。これらの事実は先に想定した口頸部形態と胴部文様それぞれの変化の方向性を検証するものである。同時に，口頸部形態 A1～3類，B1類，C1・B2・C2類，B3・C3・C4類，C5類のそれぞれを指標とする5群を有意な分類単位として認めることができる。

口頸部形態×胴部形態（図7-c） 両者の間に微弱ではあるが相関が認められる。すなわち，胴部形態 A1・B1・C1類は，口頸部形態 A類と B・C類の双方とも同程度相関する。胴部形態 A2・B2・C2類は，口頸部形態 A類と B・C類の双方とも相関するが，やや後者との間の相関が強い。胴部形態 A3・B3類は，口頸部形態 B・C類だけと相関する。これらの事実は先に想定した口頸部形態 A類→B・C類，および胴部形態の変化の方向性を検証するものである。同時に，口頸部形態 A類，B・C類のそれぞれを指標とする2群を有意な分類単位として認めることができる。

最後に，以上の検討結果にもとづいて，型式の設定を行う（図8）。まず，三つの相関図す



べてにおいて、口頸部形態A類、B・C類のそれぞれを指標とする2群を有意な分類単位として認めることができた。これによって、A類を指標とする「1型式」、B・C類を指標とする「2型式」を設定する。さらに、口頸部形態×胴部文様の相関図から判明した事実によって、「2型式」は細分可能である。すなわち、口頸部形態B1類、C1・B2・C2類、B3・C3・C4類、C5類のそれぞれを指標とする4群を有意な分類単位として見出せた。これによって、B1類を指標とする「2a型式」、C1・B2・C2類を指標とする「2b型式」、B3・C3・C4類を指標とする「2c型式」、C5類を指標とする「2d型式」を設定する。このうち2a型式は、山崎純男が示した板付I式の壺(菅波2000b, p.33)におおむね相当する。これは頸部・胴部境界の内外面に段をもち、そのほとんどが高台付き(円盤貼付状)の底部であり、文様をもたない。ここでの分析を通じて、その分類単位としての妥当性を検証することができた。

また、「1型式」についても、次の事実にもとづいて細分が可能である。口頸部形態×底部形態の相関図において、口頸部形態A2類はA1・3類とは異なり、底部形態A1類と相関する。口頸部形態×胴部文様の相関図において、口頸部形態A3類はA1・2類とは異なり、胴部文様1・2類とは相関しない。口頸部形態×胴部形態の相関図において、口頸部形態A1類はA2・3類とは異なり、胴部形態A1・2類と相関する。こうした事実によって、口頸部形態A1類を指標とする「1a型式」、A2類を指標とする「1b型式」、A3類を指標とする「1c型式」を設定する。以上の型式は、1a・1b・1c型式→2a型式→2b型式→2c型式→2d型式という序列を想定できる。なお、本稿で設定した型式数と、中園(1994)が「属性分析」によって設定した型式のうち、おおむね同時期幅に属するものとを抽出して比べると、本稿の方が少なくなっている。これは、対象資料の範囲、属性変異の抽出の仕方などの違いが影響したものと考えられる。

## (2) 突帯文系深鉢／甕

- 1類：胴部に屈曲をもち、口縁部だけに1条の刻目突帯をもつもの。
- 2類：胴部に屈曲をもち、口縁部だけに1条の刻目突帯をもつもの。
- 3類：口縁部と胴部上位に刻目突帯をもつもの。胴部に屈曲をもつものともたないものがあり、屈曲の程度も強弱があるが、ここでは問わない。
- 4類：口縁部と胴部上位に突帯をもち、口縁部突帯が胴部上位突帯にくらべ大きいもの。胴部に屈曲はもたない。突帯上に刻目をもつa類ともたないb類に細分できる。
- 5類：口縁部に断面三角形の突帯をもつもの。突帯に刻目はない。

以上の分類は、1類→2・3類→4・5類という序列を想定できる。

## (3) 如意形口縁系深鉢／甕

- 1類：口縁部が内湾するもの。
- 2類：口縁部が直立するもの。口縁端部に刻目をもつa類ともたないb類に細分できる。
- 3類：口縁部がやや外反し、その端部に刻目を施すもの。学史上の「板付祖型甕」に相当する。
- 4類：口縁部が外反するもの。口縁端部に、刻目をもつa類ともたないb類に細分できる。

5類：口縁部が外反し，胴部上位に段をもつもの。口縁端部には刻目を施す。胴部上位の段上に，刻目をもつa類ともたないb類に細分できる。

6類：口縁部が外反し，胴部上位に沈線をもつもの。口縁端部には刻目を施す。

7類：口縁部が外反し，胴部上位に突帯をもつもの。口縁端部，胴部上位の突帯上に，刻目をもつa類ともたないb類に細分できる。

以上の分類は，1・2類→3類→4類→5類→6類→7類という序列を想定できる。

(4) 浅鉢／高坏

1類：平面形が方形で，口縁部が波状をなすもの。

2類：口縁部が逆くの字形をなすもの。

3類：口縁部が直立するもの。

4類：口縁部が外反するもの。

5類：口縁部が4類より外反し，内面に段をもつもの。

以上の分類は，1→2類→3類→4類→5類という序列を想定できる。

C 編年

ここでは，先に行った諸器種の型式あるいは分類からなる一括資料を用いて，編年を行う。もとより，編年に用いる一括資料は，時間差を鋭敏に反映する器種を豊富に含み，かつそれら

期	基準一括資料	小形壺							突帯文系深鉢／甕					如意形口縁系深鉢／甕							浅鉢／高坏					
		1a	1b	1c	2a	2b	2c	2d	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	
I期	雀居5次SD003下層							○	○	○			○	b	+	+					○	○	○			
	板付G7a・b区下層		○							○	○				+											
	板付E5・6区9層			○						○	○		○	b									○			
	板付E5・6区8層		○	○						○	○		○	b							○	○	○			
	諸岡F区黒色粘質土層		○	○				○	○	○	○		○	b												
II期	那珂37次SD02		○	○					○	○					○		+						○			
	雀居5次SK159								○	○			○	○									○			
	雀居10次SK124				○				○	○				○									○			
	雀居12次SK024			○					○	○	+				○	a							○	○		
III期	雀居9次169号土坑						←○→			○					○	a							○	○	○	
	雀居10次SK002									○						a							○	○	○	
	下月隈C SK500						←○→			○						a							○	○	○	
	下月隈C SK488						←○→			○	○												○	○	○	
	下月隈C SD507									○	○						a									○
IV期	雀居10次SK018				○	○			○						○	ab	a									
	雀居5次SK188					○	○									a	b									○
	下月隈C SK460					○					○					a	b									○
V期	板付市営1区SK106			+		○				←○→						a										○
	那珂21次SK47			+			○			●						a	a	○				+		○		
	比惠28次SK03						←○→			○						a										
VI期	比惠30次SU010					○	○									ab	b		b							
	比惠30次SU016下層					○	○									ab	b	○	a					○		
	比惠30次SU022														○	ab	a									
VII期	板付市営1区SK32										a					a			a							
	比惠30次SU006				+	←○→					a	○				a		○	ab							
	比惠37次SU039						○				a					ab		○	a							
	比惠25次7-2層				+	○	○	○				ab	○				b	b		a						

a: 刻目あり b: 刻目なし ●: 不確実 +: 混入

図9 編年のための資料














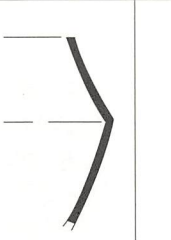
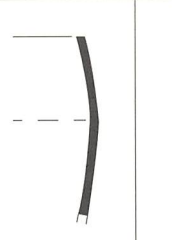
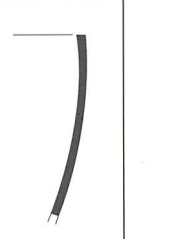
刻目の施文法					
a	b	c	d	e	
					
					
指頭によって○字形あるいは横長の楕円形をなすもの。断面はU字形で、刻目内に爪の痕跡を残すものもある。	棒状工具によって縦長の楕円形をなすもの。断面はU字形で、刻目内に線状痕を残すものもある。	木口あるいはへら状工具によってD字形あるいは逆D字形をなすもの。断面は非対称のV字形をなす。	へら状工具によって縦長の菱形をなすもの。断面はほぼ対称のV字形をなす。	く字形あるいは逆く字形をなすものなど、二枚具による刻目を一括する。	
口縁部突帯の位置			器形		
a	b	c	a	b	c
					
口縁部から突帯一つ分ほど下がった位置に貼り付けたもの。	口縁部からわずかに下がった位置に貼り付けたもの。	口縁部に接して貼り付けたもの。	強く屈曲するもの。	わずかに屈曲するもの。	屈曲せずに底部にむかってそのまますぼまるもの。

図10 突帯文系深鉢／甕の3属性の分類

が短期間に埋没したと判断されるものが望ましい。ところが、本稿で対象とした時期の一括資料には、良好とは言えないものも含んでいる。一括資料を古新の傾向に沿って配列しようとすると、一資料中に全器種を通して看取される傾向性から逸脱した型式の存在に気づく。こうした型式については混入品とみなし、一括資料の配列に際しての判断材料とはしなかった。なお、一括資料の選定にあたっては、先行研究（吉留1994；小南2005；所2005；宮地2008）を参考としたが、器種が十分にそろっているか、資料の一括性は十分に確保できているかによって、筆者自身が取捨選択を行った。

さて、以上の経緯を経て、一括資料の配列作業を行った結果、7つの分類単位を認めることができた（図9）。すなわち、第1・第2の単位間の境界は、突帯文系深鉢／甕1類の消滅、如意形口縁系深鉢／甕3・4類の出現、浅鉢／高杯1類の消滅に見出せる。第2・第3の単位間の境界は、小形壺1a・1b型式の消滅、2a型式（2b型式あるいは2c型式）の出現、如意形口縁系深鉢・甕1類の消滅、浅鉢／高杯2類の消滅、同5類の出現に見出せる。第3・第4の単位間の境界は、突帯文系深鉢／甕2・3類の急激な減少、如意形口縁系深鉢／甕5類の出現に見出せる。第4・第5の単位間の境界は、小形壺2a型式の消滅、如意形口縁系深鉢／甕6類の出現に見出せる。第5・第6の単位間の境界は、突帯文系深鉢／甕2・3類の消滅、如意形口縁系深鉢／甕7類の出現に見出せる。第6・第7の単位間の境界は、小形壺2d型式の出現に見出せる。



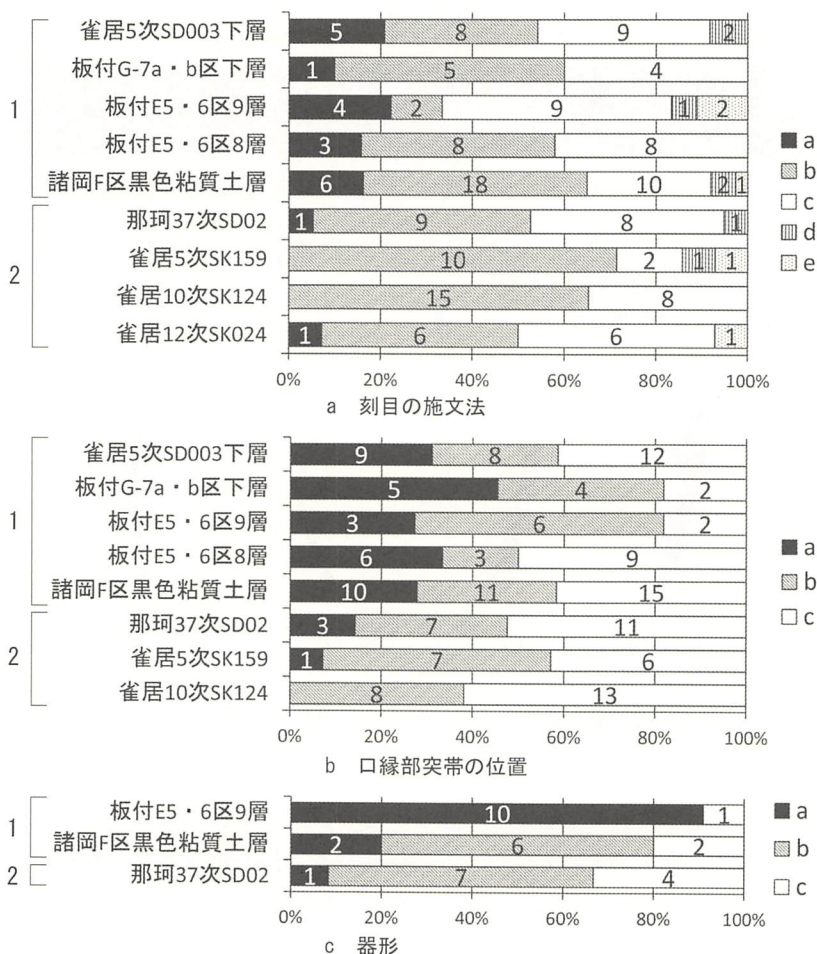


図11 突帯文系深鉢／甕の3属性の構成比

以上の単位間の境界のうち、第1・第2のそれについては、突帯文系深鉢／甕の属性ごとの傾向を検討することによって、妥当性をさらに高めたい。ここでの検討は、刻目の施文法、口縁部突帯の位置、器形の3属性を対象とする(図10)。なお、3属性のうち、後2者の分類は藤尾(1990)に依拠し、各属性の構成比の検討は、10個体以上の資料数を確保し得た一括資料だけを取り上げる(図11)。刻目の施文法の構成比は、第1の単位ではa類(指頭による刻目)が一定量含まれるのに対し、第2の単位ではそれがなく、微量にとどまる。口縁部突帯の位置の構成比は、第1の単位ではa類(突帯一つ分ほど下がった位置)が一定量含まれるのに対し、第2の単位ではそれが少量しか存在せず、代わりにc類(口縁端部に接する位置)が多くを占める。器形の構成比は、第1の単位ではa類(強く屈曲)が多量あるいは一定量含まれるのに対し、第2の単位ではそれが微量にとどまり、代わりにb類(わずかに屈曲)・c類(屈曲なし)が多くを占める。ここで3属性において看取された傾向性は、一括資料の時期差を表しているとみなしてよく、第1・第2の単位の間境界を設けることの妥当性を示している。

ところで、第3の単位に属する一括資料における小形壺2a型式の不在について、言及しておく必要がある。現状の第3の単位に相当する一括資料群からは一見、先行する第2の単位に存在する1a・1b型式から、一～二つの型式とばして、2bあるいは2c型式へと変化するようにみえる。しかし、第4の単位には2b・2c型式とともに、2a型式が存在するわけであるから、先に想定した型式変化からみて当然、第3の単位にも2a型式の存在が予測される。下月隈天神森遺跡（福岡市教委1996）の墓群から、2a型式の壺がまとまって出土しており、これらの墓には第3の単位に属するものも含まれているものとする。したがって本稿では、第2・第3の単位間の境界を認めるための要素として、2a型式の出現をあげた次第である。今後の調査によって、第3の単位に属する、小形壺2a型式を含む良好な一括資料が発見されれば、この問題は解消されよう。

以上の分析結果にもとづいて、「期」を設定しよう。すなわち、第1～7の単位をそれぞれ、I～VII期と呼ぶこととする。既存の編年案との対比は次章にゆだねるが、読者の理解の助けとなるよう、北部九州の一般的な土器編年観でいえば、I期は山ノ寺・夜白I式期、II期は夜白II式期、III期は板付I a式期（板付I式古段階）、IV期は板付I b式期（板付I式新段階）、V期は板付II a式期、VI期は板付II b式期、VII期は板付II c式期におおむね相当しよう（図12・13）。

## IV 考 察

### A 既存の編年案との対比

以上の分析で導かれた編年案と、既存の編年案とを対比しよう。ここで特に問題としたいのは、第I章で述べたように、吉留編年「3式」の時間的独立性、板付I式単純期の存否をめぐる問題の二つである。

まず、吉留編年「3式」の時間的独立性について議論する。福岡平野の当該期の土器編年を検討した吉留秀敏は、突帯文単純期の最終段階として、板付I式の甕が出現する段階を設定した（吉留1994）。これは突帯文単純期を3期に細分する案であり、異論もあるが、近年は支持する見解（小南2005；宮地2008；宮本2011）も多い。

これに対して、本稿では板付I式甕が壺に先行して出現する点は認めつつも、突帯文単純期をI・II期の二つに分けるにとどめている。これは、これまで突帯文単純期に属するとされてきた一括資料群を配列した結果、そこに、一つしか境界を見出すことができなかったことによる。

突帯文単純期の3期細分案において、鍵となるのが野多目遺跡SD02下層資料である。この資料は、これまでの研究で那珂遺跡37次SD02資料より一つ前の段階に置かれることも多いが、筆者はこれを基準一括資料に用いなかった。というのも、この資料中には新旧の遺物が混在しており、埋没にかかった期間が比較的長かったとみられるからである。筆者の実見によると、突帯文系深鉢／甕には古相を示す刻目の施文法a類が4.0%、口縁部突帯の位置a類が33.3%みられる一方で、如意形口縁系深鉢／甕3類、浅鉢3・4類といった新出の要素も含まれてい

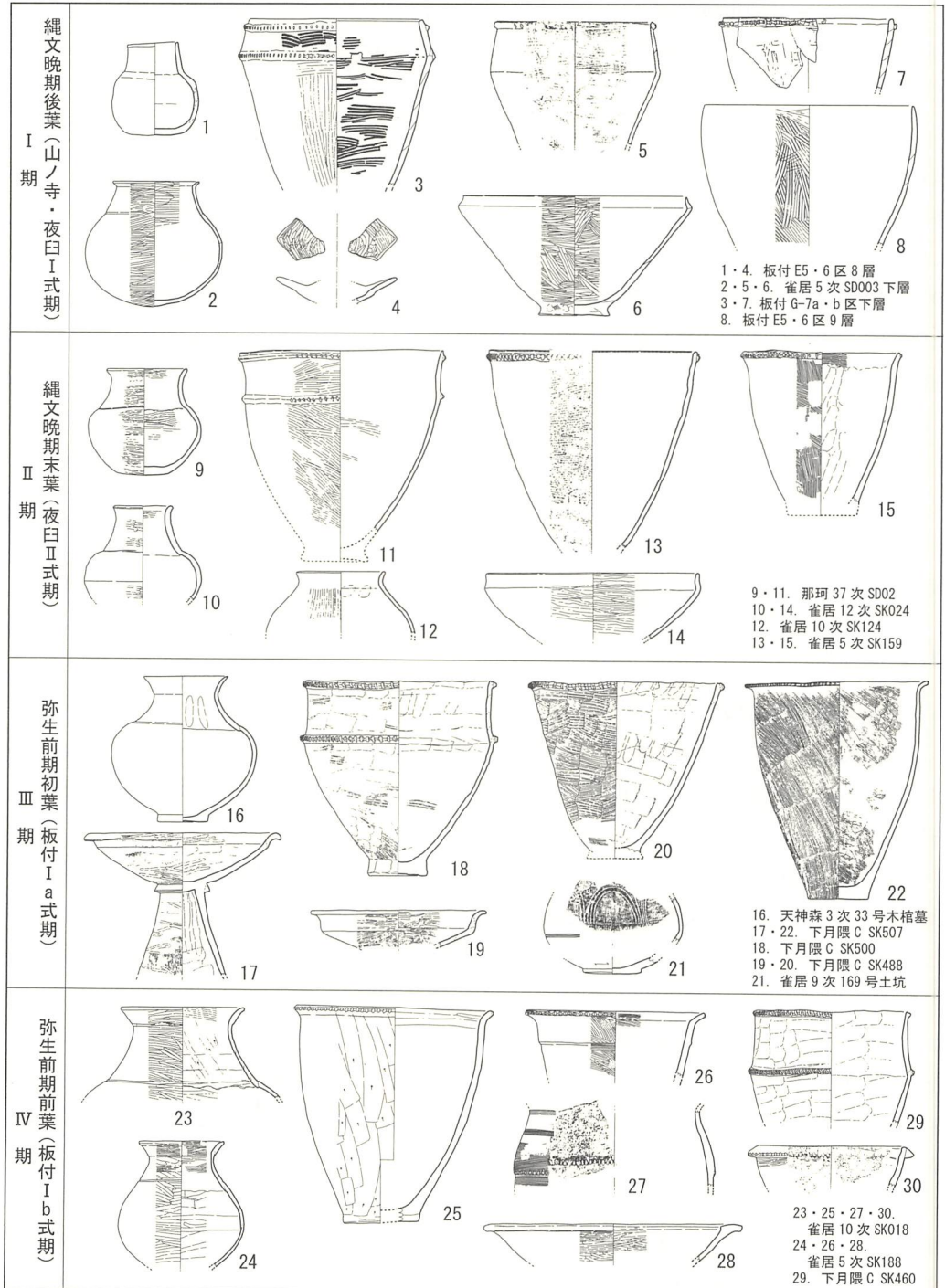


図12 編年図1 (1/8)  
各期の特徴的なものだけを抽出して表示。図13も同じ。



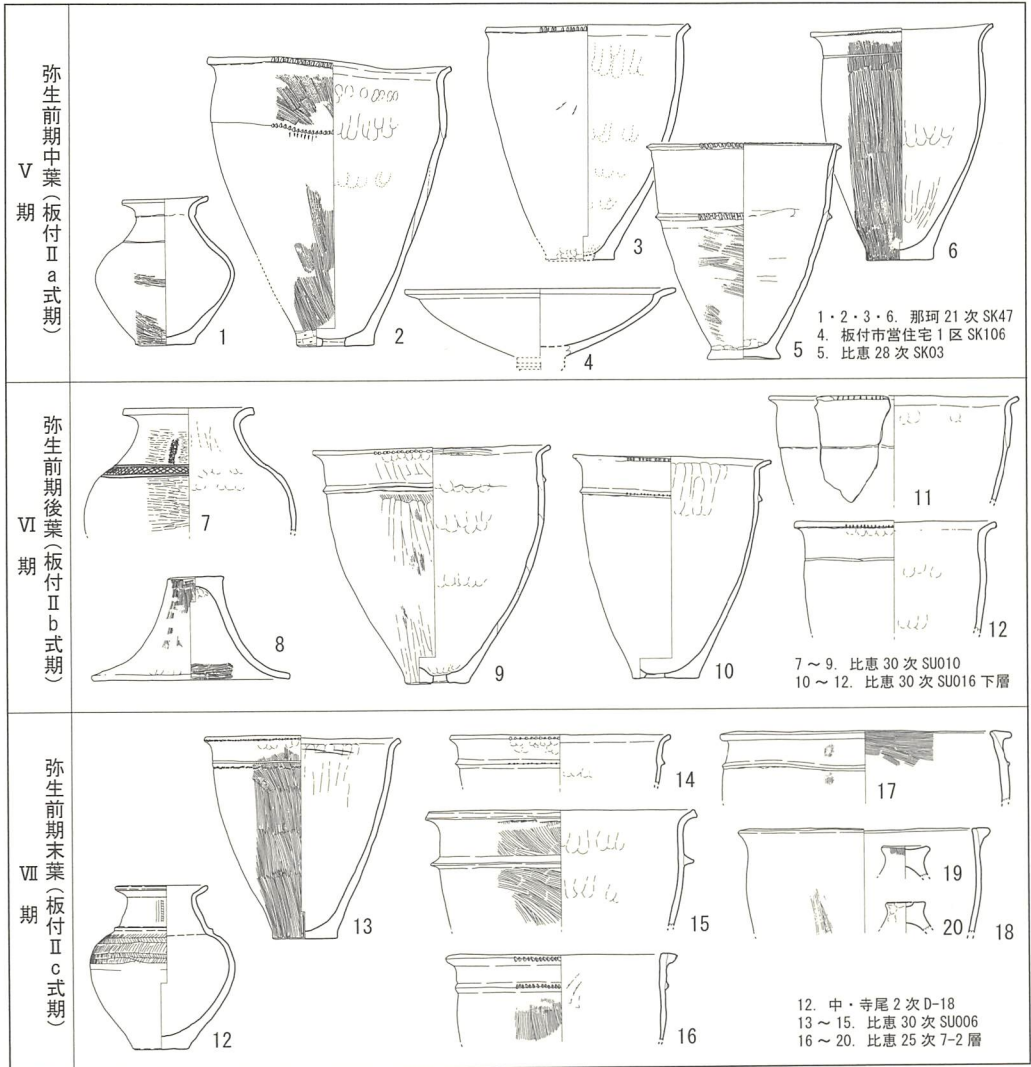


図13 編年図2 (1/8)

ることが分かった。口縁部突帯の位置 a 類の比率は、本稿の I 期の基準一括資料のそれと同程度である。こうした事実は、研究者がどの器種(のどの属性)に注目するかによって、この資料の時間軸上の位置づけが異なってしまうことを示している。実際、この資料の位置づけは、研究者間でズレが生じており、山崎(1980)の編年でいえば、「夜白 I 式」とみる見解(家根1993;菅波1996;小南2005)と、「夜白 II a 式」とみる見解(吉留1994;宮地2008)とに分かれている。

野多目遺跡 SD02上層・SD01資料を除外したのも、これと同様の理由からである。すなわち、この資料は、突帯文系深鉢/甕に古相を示す刻目の施文法 a 類が11.1%、口縁部突帯の位置 a 類が15.0%みられる一方で、小形壺2b・2c型式や如意形口縁系深鉢/甕 3・4 類といった

新出の要素もみられる。

なお、山崎（1980）の基準資料であり、先行研究でもよく使用されてきた板付遺跡 G-7a・b 中層・上層資料なども、本稿では基準一括資料として採用しなかった。これは、現在の資料状況を見渡すと、これらがそれほど良好な一括資料とはみなせないからである。

続いて、板付 I b 式期をめぐる問題についても、言及しておこう。その問題とは、福岡平野において、突帯文土器を払拭した板付 I 式単純期が存在するのか否かの問題である。今川遺跡 V 字溝資料により、板付 I 式単純期が設定され（伊崎1981）、その後、福岡平野の編年において、雀居遺跡 SK188 資料が、これと同時期の資料として位置づけられている（菅波2000a；田畑2000；小南2005）。これに対し、この段階にも突帯文土器の存在を認める見解（田崎2000；所2005）があり、このうち田崎（2000）は、板付 II a 式段階までごく例外的に残存するとみている。

筆者は、板付 I b 式期にあたる IV 期での突帯文土器の存在を認め、それに続く V 期（板付 II a 式期）まで残存すると考えている。突帯文土器が完全に払拭されるのは、VI 期を待たねばならない。板付 I b 式期を突帯文土器が払拭された時期とし、この時期をもって弥生時代の開始とみる見解（泉1990；家根1993；小南2005）もあるが、突帯文土器の消滅は、時代区分の指標とするには明快さを欠いている。これに対して、筆者は冒頭でも述べたように、板付 I 式壺（2a 型式）の出現をもって弥生時代の開始とみなす。

## B 壺の系譜

最後に、列島の縄文晩期後葉に出現する壺の系譜について、議論しよう。まず、本稿の分析結果にもとづいて、列島で出現した当初の壺の有り様について確認する。壺の型式組列において、最古相に位置づけられるのは、1a・1b・1c の 3 型式である。これらの型式のうち、1a・1b 型式の二つは、本稿編年で最も古い I 期から存在し、II 期まで存続することが、基準一括資料を通じて確認できる。1c 型式は II 期に存在が確認できるが<sup>6)</sup>、前章で検討したように、型式学的には 1a・1b 型式とは別系統とみなせ、壺の出現期である I 期までさかのぼるものと予想される。この I 期より確実にさかのぼる壺の存在は、今のところ九州北部では知られていない<sup>7)</sup>。

それでは、壺の出現期とみなせる I 期は、その起源地である半島南部の土器編年のどの時期に併行するのであろうか。以前に筆者は、慶尚南道網谷里遺跡環濠出土の突帯文土器を含む資料（慶南発展研究院歴史文化센터2009）と、列島の突帯文単純期資料との間で、交差年代法を適用することによって、半島の無文土器中期（休岩里式期～松菊里式期）と列島の縄文晩期後葉と間に、時期的に併行する一点を見出した（端野2010）。今一度、I 期の基準一括資料と網谷里遺跡環濠資料の間で、交差年代法を適用してみよう。すると、I 期の基準一括資料中には網谷里遺跡例に類似する内湾甕（如意形口縁系 I 類）、丸底壺（小形壺 1b 型式の一部と底部が共通）が含まれ、一方の網谷里遺跡資料には I 期資料の突帯文土器（突帯文系 3 類）に類似する土器

が含まれるという関係が成り立つ。網谷里遺跡資料は、半島南部の土器編年（後藤2006）でいえば、先述の内湾甕を含み、かつ口縁部が外反する甕あるいは大型壺は全く含まないことから、無文土器中期前半に位置づけられる。したがって、I期と無文土器中期前半とが一時的に併行していたことは間違いない。

こうした土器編年の併行関係にもとづくと、I期に存在する小形壺1a・1b型式、あるいは型式学的にはその時期までさかのぼる可能性をもつ1c型式の祖型は、半島南部の無文土器中期前半の丹塗磨研壺の中に求めることができる。筆者の丹塗磨研壺の分類（端野2003, 2006；Hashino2011）でいえば、1a型式は小形AⅡ類、1b型式は小形AⅢ類、1c型式は小形B類<sup>8)</sup>にそれぞれ系譜が求められる。これは、筆者がかつて半島南部の丹塗磨研壺を検討した際に提出した見解（端野2006；Hashino2011）を、列島資料の型式学的手続きをふまえて、とらえ直したものである。

さて、以上の祖型に対する理解をふまえ、つづいて列島の壺の起源地を議論しよう。旧稿（端野2006；Hashino2011）では、型式・底部形態・出土遺構の組成を検討し、南江流域を起源地とみた。これは、南江流域には、列島の1a・1b・1c型式などの壺の祖形とみなせる型式のすべてがバランスよくそろっているとみたからであった。しかし、型式組成に注目するあまり、南江流域だけを強調しすぎていた。近年の増加した資料では、列島の1b型式に類似する半島の小形AⅢ類（咸安式）の分布は、洛東江下流域とその東辺に広がることが示されており（裴眞成2008）、筆者も洛東江下流域は南江流域に次いで、型式組成の点で類似している地域であることは把握していた。現在はこの地域も含めて起源地と考えている（端野2014）。

なお、半島の小形AⅢ類（咸安式）を無文土器中期後半（松菊里式期）の新段階～後期前半（水石里式期）に位置づけ、この時期が列島の突帯文期に併行するとみる見解（裴眞成2008）もあるが、これには賛同できない。この時期に位置づける主な根拠は、円形松菊里型住居跡を切った墓から、この型式の土器が出土していることである。しかし、遺構の切り合い関係は、遺構の先後関係は表すが、考古学的時期区分の新旧を直接表すものではない。ましてやそれで時期区分を設定することはできない。同時期の遺構間で切り合い関係が発生する場合も当然、あり得るのである。この型式は現状で、無文土器後期前半まで下がる積極的な証拠もない。

## おわりに

以上、北部九州の板付I式成立前後の壺の分類と型式設定、そして当該期の土器編年を検討した。本稿では、紙幅の都合上、基礎的な作業の結果を示すにとどまり、北部九州における壺の受容、板付I式の成立についての議論などは全く行えなかった。また、半島・列島間の編年の併行関係や壺の起源地についても、検討すべき課題を多く残している。これらについては、稿を改めて論じたい。



## 謝辞

本稿は、平成24年度九州史学会考古学部会で発表した内容を骨子として、さらに分析を加え、議論を展開させたものである。席上で、岩永省三・宮本一夫・溝口孝司の諸先生から有益なご教示を賜った。また、同僚の三阪一徳氏には日常的に、私の要領を得ない議論に辛抱強くおつき合いいただいた。下記の諸氏・諸機関にも、資料調査や本稿の作成にあたってお世話になった。記して感謝の意を表したい。

阿部泰之・糸島市教育委員会・井上義也・大野城市教育委員会・岡部裕俊・春日市教育委員会・粕屋町教育委員会・唐津市教育委員会・九州大学考古学研究室・新宅信久・田子森千子・福岡県教育委員会・福岡市教育委員会・福津市教育委員会・裊眞成・星野恵美・宗像市教育委員会・山口譲治・山崎純男・山田広幸（敬称略・五十音順）

なお、本稿は JSPS 科研費09J04282, 韓昌祐・哲文化財団, 稲森財団の助成を受けたものである。

最後に、「考古学は科学か」という問いに私なりに答えておきたい。田中先生ご本人はもちろん「考古学なんて科学じゃない」ではなく、「考古学は科学である」、いや「考古学は科学でなければならない」とお考えであったにちがいない。すると、残された私たちが目指すところはおのずと明らかとなる。すなわち、考古学を科学たらしめるにはどうすればよいのか、それを常に問いかけ続けることを忘れず、それぞれが自身の力で学問の道を切り開いていくこと、これが先生の一番おっしゃりたかったことではないかと勝手ながら思うのである。この命題に対して、本稿が果たして十分に答えられているのかはいささか心もとなく、多大な学恩を賜ったにもかかわらずたいへん申し訳なく思うが、これを捧げたい。

先生、本当にありがとうございました。

## ■註

- 1) これを指標とする理由は別稿で詳細に論じたい。
- 2) この論文は沈奉謹が九州大学留学中に仕上げたレポートがもとになっており、当時、この内容を周りの研究者に話したが、ごく一部を除き、ほとんど誰も賛同しなかったらしい。多くの人がこうした態度をとった背景には、板付I式を渡来人の土器、山ノ寺式・夜臼式をそれに影響を受けた在来人の土器とみる見解（春成1973）があったからだという（田中良之先生からのご教示）。なお、春成の見解は、その後、板付遺跡をはじめとする調査で、突帯文単純期の存在が確実となったことで成立し得なくなった。
- 3) この方法は、これまで「田中の方法」（溝口1987）、あるいは「狭義の属性分析」（中園1996）と呼ばれてきた。今日まで多くの実践例が提出されてきた汎用性の高い分析手法の一つであるが、残念なことに、これに対する誤解や無理解も多いようである。生前、田中良之先生は「属性分析」と呼ぶから色々誤解が生まれるのだ。いつそのこと「2属性相関法」とでも呼んでしまえばどうかと筆者にしばしば語っておられた。本稿では方法開発者の意見を尊重し、この名称を用いたい。なお、この方法の系統を引く方

法を用いた1991年までの実践例とその類型については、中村直子（1991）が詳しい。

- 4) なお、本稿で「期」を用いるのは、以上の作業を通じて得られた一括資料群が表わす単位が、厳密には「様式」とは言えないことによる。弥生土器研究における「様式」とは、小林行雄（1933）によって提出された概念で、各形式（器種）を横断し、形式を構成する型式を、形態・文様・製作技術などの類似する特徴を手がかりに組み合わせたものであり、一定の時間的・空間的位置を占める（田中琢1978）。また、これには同一技術体系の所産で、かつ相互補完的に生活の要求を満たしていた有機的な複合体という意味合いが込められている（横山1985）。本稿の方法で得られる単位は、純粋な一つの「様式」によって構成される場合だけでなく、その前後の時期の「様式」に属する土器型式が、器種によっては含まれる場合も予想される（岩永1989）。また、「様式」を設定するには、諸器種における型式の時間的な位置づけだけでなく、空間的な広がりまで検討する必要がある。本稿ではこうした課題を解決する余力はないため、「様式」ではなく、「期」を採用する次第である。

ところで岩永省三は、武末純一（1977a, 1977b, 1978）の方法に対し、その有効性を評価する一方で、「弱点もあり、土器編年の主眼をあくまでより細かいタイムスケールの作成に置いた立場からみれば、「この方法は「役立たず」になってしまうかも知れない」とする（岩永1989, p.52）。しかし、これはあたかも「より細かいタイムスケール」を作成可能な方法が存在するような誤解を招く記述であろう。ここでの「より細かいタイムスケール」を求める立場とは、岩永のいう「基準器種を設け、その型式分類・編年を軸とする」方法（岩永1989, p.49）を採用する立場に相当すると思われる。岩永はこの方法に対して未検証仮説を前提とするとして批判しているのだから、この方法によって「より細かいタイムスケール」を導き出せるという認識自体がそもそも成立し得ない。もとより、有意ではない「細かいタイムスケール」を追い求めることより、正しい方法によって有意な時間尺度を得ることこそが考古学研究には必要なのである。

- 5) 沈線重弧文の祖型を、雀居遺跡10次調査 SK124例（福岡市教委2003a の Fig.234-38）にみられる「隆線重弧文」とみて、板付 I 式土器の成立に東日本系土器の関与を想定する見解（設楽・小林2007；設楽2009）がある。本稿では、東日本系の疑いがかけられた、こうした資料を分析対象から除いている。この見解の是非を論じるには、紙幅を多く費やさなければならないので、別稿にゆずりたい。
- 6) II期の基準一括資料である雀居遺跡10次調査 SK124に含まれる 1c 型式の例（図12-12）は、筆者の実見によると、器厚の薄さや金雲母を多量に含む微細な胎土からみて、半島南部からの搬入品の可能性が高い。本来は在地製作品によって、この型式の編年の位置づけを行うべきだが、共伴遺物による位置づけが可能な例を対象資料中に見出せなかった。今後、好資料が得られ次第、再検討したい。
- 7) 南九州では近年、黒川式期の壺が報告されており（東2002, 2006）、この系譜についても議論を深める必要があろう。
- 8) 旧稿（端野2003, 2006；Hashino2011）では、A系列（頸部と胴部との間に明瞭な境界をもつもの）、B系列（口縁部から胴部にいたるまでスムーズに連続するもの）、C系列（頸部と胴部との間に不明瞭な稜をもつもの）の三つに器種分類した。しかし、B系列とC系列のいずれかが判別が困難な例もあるため、本稿では、この両者を統合して新たにB系列を設定する。

## ■文献

（日本語文）

- 伊崎俊秋, 1981. 弥生土器について. 酒井仁夫（編）, 今川遺跡. 津屋崎町教育委員会, 津屋崎. pp.81-85.
- 泉拓良, 1990. 西日本凸帯文土器の編年. 文化財学報 8, 55-79.
- 岩永省三, 1989. 土器から見た弥生時代社会の動態. 横山浩一先生退官記念事業会（編）, 生産と流通の考

- 古学(横山浩一先生退官記念論集Ⅰ), 横山浩一先生退官記念事業会, 福岡, pp.43-105.
- 大野城市教育委員会, 1977. 中・寺尾遺跡.
- 大野城市教育委員会, 1997. 御陵前ノ椽遺跡.
- 大野町教育委員会, 1971. 中・寺尾遺跡.
- 小田富士雄, 1986. 北部九州における弥生文化の出現序説. 九州文化史研究所紀要 31, 141-197.
- 春日市教育委員会, 2003. 伯玄社遺跡.
- 春日市教育委員会, 2011. 平若A遺跡.
- 唐津市教育委員会, 1982. 菜畑遺跡.
- 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室, 2001. 佐賀県大友遺跡.
- 小林行雄, 1933. 先史考古学に於ける様式問題. 考古学, 4-8.
- 小南裕一, 2005. 北部九州地域における弥生文化成立期前後の土器編年. 古文化談叢 52, 13-44.
- 後藤直, 1980. 朝鮮南部の丹塗磨研土器. 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会(編), 古文化論攷(鏡山猛先生古稀記念). 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会, 太宰府, pp.269-306.
- 後藤直, 2006. 南部地域の前期・中期無文土器. 後藤直(編), 朝鮮半島初期農耕社会の研究. 同成社, 東京, pp.51-72.
- 設楽博己, 2009. 東日本系土器の西方への影響. 設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦(編), 弥生文化誕生. 同成社, 東京, pp.188-203.
- 設楽博己・小林青樹, 2007. 板付I式土器成立における亀ヶ岡系土器の関与. 西元豊弘(編), 縄文時代から弥生時代へ. 雄山閣, 東京, pp.66-107.
- 志摩町教育委員会, 1987. 新町遺跡I.
- 志免町教育委員会, 1996. 松ヶ上遺跡.
- 住宅・都市整備公団, 1982. 十郎川(二)福岡市早良平野石丸・古川遺跡.
- 菅波正人, 1996. 玄界灘沿岸地域の弥生前期土器について. 山口考古学談話会百回記念大会実行委員会(編), 西部瀬戸内の弥生文化. 山口考古学談話会百回記念大会実行委員会, 山口, pp.19-42.
- 菅波正人, 2000a. 北部九州における弥生文化の成立. 埋蔵文化財研究集会(編), 第47回埋蔵文化財研究集会弥生文化の成立—各地域における弥生文化成立期の具体像—. 埋蔵文化財研究集会, 高知, pp.167-186.
- 菅波正人, 2000b. 夜白式土器と板付式土器. 田崎博之(編), 突帯文と遠賀川. 土器持寄会論文集刊行会, 松山, pp.24-35.
- 杉原荘介, 1977. 日本農耕社会の形成. 吉川弘文館, 東京.
- 武末純一, 1977a. 遺物の検討(1)弥生土器. 福岡県教育委員会(編), 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIX. 福岡県教育委員会, 福岡, pp.194-215.
- 武末純一, 1977b. 遺物の検討(2)土師器. 福岡県教育委員会(編), 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIX. 福岡県教育委員会, 福岡, pp.215-227.
- 武末純一, 1978. 福岡県・早良平野の古式土師器. 古文化談叢 5, 37-62.
- 田崎博之, 1994. 夜白式土器から板付式土器へ. 牟田裕二君追悼論集刊行会(編), 牟田裕二君追悼論集. 牟田裕二君追悼論集刊行会, 太宰府, pp.35-74.
- 田崎博之, 2000. 壺形土器の伝播と受容. 田崎博之(編), 突帯文と遠賀川. 土器持寄会論文集刊行会, 松山, pp.737-789.
- 田中琢, 1978. 型式学の問題. 大塚初重・戸沢充則・佐原眞(編), 日本考古学を学ぶ(1). 有斐閣, 東京, pp.14-26.
- 田中良之, 1982. 磨消縄文土器伝播のプロセス. 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会(編), 古文化論集:



- 森貞次郎博士古稀記念. 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会, 福岡, pp.59-96.
- 田中良之, 1986. 縄文土器と弥生土器1. 西日本. 金閃忽・佐原真(編), 弥生文化の研究3. 雄山閣出版, 東京, pp.115-125.
- 田中良之・松永幸男, 1984. 広域土器分布圏の諸相. 古文化断叢 14, 81-117.
- 田畑直彦, 2000. 西日本における初期遠賀川式土器の展開. 土器持寄会論文集刊行会(編), 突帯文と遠賀川. 土器持寄会論文集刊行会, 松山, pp.913-956.
- 津屋崎町教育委員会, 1981. 今川遺跡.
- 所一男, 2005. 下月隈C遺跡第6次調査出土刻目突帯文土器の位置付けについて. 福岡市教育委員会(編), 下月隈C遺跡. 福岡市教育委員会, 福岡, pp.247-254.
- 中島直幸, 1982. 初期稲作期の凸帯文土器. 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会(編), 古文化論集(森貞次郎博士古稀記念). 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会, 福岡, pp.297-354.
- 中園聡, 1994. 弥生時代開始期の壺形土器—土器作りのモーター・ハビットと認知構造. 日本考古学 1, 87-101.
- 中園聡, 1996. 属性分析と多変量解析を用いた土器の型式分類—その意義と実践—. 情報考古学 2 (1), 1-27.
- 中村大介, 2003. 弥生文化早期における壺形土器の受容と展開. 立命館大学考古学論集刊行会(編), 立命館大学考古学論集Ⅲ. 立命館大学考古学論集刊行会, 京都, pp.415-432.
- 中村直子, 1991. 古式土師器甕形土器の型式学的検討. 古文化談叢 25, 93-111.
- 二丈町教育委員会, 1995. 大坪遺跡1.
- 二丈町教育委員会, 1997. 矢風遺跡Ⅱ.
- 橋口達也, 1979. 九州の弥生土器. 座右宝刊行会(編), 世界陶磁全集1 日本原始. 小学館, 東京, pp.212-238.
- 橋口達也, 1985. 日本における稲作の開始と発展. 橋口達也(編), 石崎曲り田遺跡. 福岡県教育委員会, 福岡, pp.5-103.
- 端野晋平, 2003. 韓半島南部丹塗磨研壺の再検討—編年・研磨方向を中心として—. 九州考古学 78, 1-21.
- 端野晋平, 2006. 朝鮮半島南部丹塗磨研壺の編年と地域性—嶺南地方を中心として—. 有限責任中間法人日本考古学協会(編), 有限責任中間法人日本考古学協会第72回総会研究発表要旨. 有限責任中間法人日本考古学協会, 東京, pp.238-251.
- 端野晋平, 2010. 近年の無文土器研究からみた弥生早期. 季刊考古学 113, 31-34.
- 端野晋平, 2014. 渡来文化の形成とその背景. 公益財団法人古代学協会(編), 列島の初期稲作の担い手は誰か. すいれん舎, 東京, pp.79-124.
- 春成秀爾, 1973. 弥生時代はいかにしてはじまったか—弥生式土器の南朝鮮起源をめぐって—. 考古学研究 20 (1), 5-24.
- 東和幸, 2002. 縄文時代晩期土器について. 鹿児島県立埋蔵文化財センター(編), 計志加里遺跡. 鹿児島県立埋蔵文化財センター, 鹿児島, pp.155-157.
- 東和幸, 2006. 鹿児島における縄文時代の課題. 南九州縄文通信 17, 65-73.
- 福岡県教育委員会, 1981. 三雲遺跡Ⅱ.
- 福岡県教育委員会, 1984. 石崎曲り田遺跡Ⅱ.
- 福岡市教育委員会, 2003. 雀居遺跡8.
- 福岡市教育委員会, 1976a. 鶴町遺跡.
- 福岡市教育委員会, 1976b. 板付—市営住宅建設にともなう発掘調査報告書—.
- 福岡市教育委員会, 1976. 板付周辺遺跡調査報告書(3).

- 福岡市教育委員会, 1979. 板付遺跡調査概報.
- 福岡市教育委員会, 1981. 板付 板付会館建設に伴う発掘調査報告書.
- 福岡市教育委員会, 1982. 藤崎遺跡.
- 福岡市教育委員会, 1983. 福岡市有田七田前遺跡.
- 福岡市教育委員会, 1987. 野多日遺跡群.
- 福岡市教育委員会, 1989. 田村遺跡VI.
- 福岡市教育委員会, 1991. 比恵遺跡群10.
- 福岡市教育委員会, 1992a. 那珂 5.
- 福岡市教育委員会, 1992b. 比恵遺跡群 (11).
- 福岡市教育委員会, 1993. 比恵遺跡群 (12).
- 福岡市教育委員会, 1994. 那珂11.
- 福岡市教育委員会, 1995a. 雀居遺跡 3.
- 福岡市教育委員会, 1995b. 板付遺跡 環境整備遺構確認調査.
- 福岡市教育委員会, 1996. 下月隈天神森遺跡III.
- 福岡市教育委員会, 1998. 福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告 5 福岡市西区橋本一丁目遺跡第 2 次調査・橋本遺跡第 1 次調査.
- 福岡市教育委員会, 1999. 入部IX.
- 福岡市教育委員会, 2000. 雀居遺跡 5.
- 福岡市教育委員会, 2003. 雀居遺跡 7.
- 福岡市教育委員会, 2005a. 下月隈C遺跡V.
- 福岡市教育委員会, 2005b. 雑餉隈遺跡 5.
- 藤尾慎一郎, 1990. 西部九州の刻目凸帯文土器. 国立歴史民俗博物館研究報告 26, 1-73.
- 松尾奈緒子, 2012. 板付 I b式期—如意形壺の胴部文様から—. 九州考古学 87, 23-45.
- 三阪一徳, 2014. 土器からみた弥生時代開始過程. 公益財団法人古代学協会 (編), 列島初期稲作の担い手は誰か. すいれん舎, 東京, pp.125-174.
- 溝口孝司, 1987. 土器における地域色—弥生時代中期の中部瀬戸内・近畿を素材として—. 古文化談叢 17, 137-158.
- 溝口孝司, 1988. 古墳出現前後の土器相—筑前地方を素材として—. 考古学研究 35 (2), 90-117.
- 宮地聡一郎, 2004a. 刻目突帯文土器圏の成立 (上). 考古学雑誌 88 (1), 1-32.
- 宮地聡一郎, 2004b. 刻目突帯文土器圏の成立 (下). 考古学雑誌 88 (2), 37-52.
- 宮地聡一郎, 2008. 凸帯文系土器 (九州地方). 小林達雄 (編), 総覧縄文土器. アム・プロモーション, 東京, pp.806-813.
- 宮本一夫, 2011a. 板付遺跡・有田遺跡からみた弥生の始まり. 福岡市史編集委員会 (編), 新修福岡市史資料編考古 3 遺物からみた福岡の歴史. 福岡市, 福岡, pp.595-621.
- 宗像市教育委員会, 1987. 宗像大井三倉遺跡.
- 宗像市教育委員会, 1999. 田久松ヶ浦—福岡県宗像市田久所在遺跡の発掘調査報告一.
- 宗像市教育委員会, 2001. 東郷登り立.
- 森貞次郎, 1966. 弥生文化の発展と地域性—九州. 和島誠一 (編), 日本の考古学III. 河出書房, 東京, pp.32-80.
- 家根祥多, 1993. 遠賀川式土器の成立をめぐる—西日本における農耕社会の成立—. 坪井清足さんの古稀を祝う会 (編), 論苑考古学. 天山舎, 京都, pp.267-329.
- 家根祥多, 1997. 朝鮮無文土器から弥生土器へ. 立命館大学考古学論集刊行会 (編), 立命館大学考古学論

集 I. 立命館大学考古学論集刊行会, 京都, pp.39-64.

山崎純男, 1980. 弥生文化成立期における土器の編年的研究. 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会 (編), 古文化論攷 (鏡山猛先生古稀記念). 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会, 太宰府, pp.117-192.

横山浩一, 1985. 型式論. 近藤義郎ほか (編), 岩波講座 日本考古学 1. 岩波書店, 東京, pp.43-78.

吉留秀敏, 1994. 板付式土器成立期の土器編年. 古文化談叢 32, 29-44.

(韓国語文)

慶南發展研究院歴史文化센터, 2009. 마산 진북 망곡리유적 I, 咸安.

裴眞成, 2008. 咸安式赤色磨研壺의 分析. 韓國民族文化 32, 265-288.

沈奉謹, 1979. 日本 彌生文化 形成過程 研究 : 韓國文化와 關聯해서. 東亞論叢 16, 153-324.

(英語文)

Clarke, D.L, 1978. Analytical Archaeology (2nd edn). Columbia U.P, Columbia.

Hashino, S., 2011. The diffusion process of red burnished jars and rice paddy field agriculture from the southern part of the Korean peninsula to the Japanese Archipelago. Matsumoto, N., Bessho, H., Tomii, M. (Ed.), Coexistence and Cultural Transmission in East Asia (One World Archeology). Left Coast Press, Walnut Creek, pp.203-221.